

第6回 全国 第6回 全国



めだか シンポジウム in 菊香る越前 たけふ 活動報告書

開催日時 平成16年10月9日(土)、10日(日)
会場 武生パレスホテル 3F ホール
及び 福祉健康センター 生涯学習センター
バスツアー3コース

主催 日本めだかトラス協会
主管 全国めだかシンポジウム in 菊香る越前たけふ
共催 武生市 武生めだか連絡会



第1日目 平成16年10月9日(土).....	2
I. 開会式 平成16年10月9日(土)13時30分～.....	2
1. 劇団たけぶえ たけのっこ劇場(団員)による歓迎のおどり.....	2
2. 開会宣言.....	2
3. 主催者挨拶.....	2
4. 三木勲男武生市市長から歓迎の挨拶.....	3
5. 来賓祝辞 岡本光之氏 環境省自然環境局総務課課長補佐).....	3
6. 表彰式.....	4
II. 基調講演 平成16年10月9日(土)14時15分～.....	6
演題 里地 里山におけるメダカをはじめとした生物多様性の保全」.....	6
講師 岡本 光之 氏 環境省自然環境局総務課課長補佐).....	6
演題 水辺の伝説や民話について」.....	10
講師 大西 伝一郎 氏 児童文学者 日本めだかトラス協会副会長).....	10
III. 分科会報告.....	13
第1分科会.....	13
第2分科会.....	15
第3分科会.....	17
第4分科会.....	18
IV. 語り部の会による市中案内.....	21
V. 交流会.....	22
第2目 平成16年10月10日(日)	23
VI. バスツアー.....	23
第1 コース.....	23
第2 コース.....	24
第3 コース.....	28
VII. 参加者の声.....	30
あとがき.....	32

第1日目 平成16年10月9日(土)

シンポジウム会場 武生パレスホテル 3F ホール

I. 開会式 平成16年10月9日(土)13時30分～

1. 劇団たけぶえ (たけのっこ劇場団員)による歓迎のおどり



ステージの幕が上がると、保育園児から中学2年生までの園児・生徒30人が元気よく舞台に現れ現代的な詩を歌いながら、魔女が滅び明るさと平和を取り戻した未来を喜ぶ軽やかなステップと躍動的な身体表現で、舞台狭ましと歓喜のダンスで来客を歓迎し、拍手喝采を浴びた。

2 開会宣言

実行委員会会長 津郷勇氏が「第6回 全国めだかシンポジウム in 菊香る越前 たけふ」開会宣言を行う。



3 主催者挨拶

日本めだかトラスト協会会長 岩松鷹司氏が主催者を代表して挨拶

めだかを通じて私たち人間と生物との共生、人間のとるべき道を探るこのシンポジウムを、御地、武生の菊の香り満ちるこの日開催できたことを御来場の皆様と共に喜びたい、ここに至る間の諸準備、昨年開催されためだかプレシンポから今日までの実行委員会初め関係各位、ご支援頂いた共催の武生市、協賛各企業、御後援頂いた国土交通省・環境省・文部科学省・農林水産省・福井県関係各位にあらためて御礼申し上げます。武生には津郷先生を代表にした「武生めだか連絡会」が早くから下水処理水を利用しためだかのビオトープを家久の浄化センターにおいて行政・学者・市民のパートナーシップで造成し、水循環の大切さをアピール、また、地域の保育園児・小中学生・市民を招いての生物観察会やホテルの夕べなど幅広く身近な自然を守る活動をすすめられ、敦賀の笹木さん達は中池見湿地の動植物、貴重な湿地保護を訴えての継続的な活動を続けておられ、

それが今日の全国めだかシンポジウムにつながっていると、敬意を表しこのシンポジウム開催を感謝する次第です。前後しますが、このシンポジウムにご理解頂き多大なご支援と共に積極的共催を頂いた武生市三木市長に感謝、協賛頂き過分にシンポジウム経費協賛金寄付頂いた県内外の多くの企業に、基調講演を引き受けて頂いたご両人、遠路をお集まりくださった会場の皆様に厚く御礼申し上げます。

この時宜を得たシンポジウム、これを機会として益々各位の自然と人間の共生に向けた活動が発展する事を願って挨拶と致します。(挨拶の概要：文責津郷)

4 三木勅男武生市市長から歓迎の挨拶

9月25日の猛烈な台風22号の接近をものともせず、武生の地にご参集の大勢の皆様、まず感謝、御礼を持って心から大歓迎申します。里地里山を見直そう自然保護をという今日、21世紀は自然保護の世紀、環境省からの御来賓、基調講演も頂く岡本光之氏のお骨折りで本市武生の白山地区が希少生物、両生類の絶滅危惧ⅠA類であり、種の棲息分布が極端に狭いとされる「アベサンショウウオ」の生息が確認された事もあり、本年6月29日に里山地域の生物多様性保護モデル地区として、全国4地区の一つに選ばれ、福井県と共に「めだかを生き物多様性のシンボル」として里山自然保護のプロジェクトがはじまりました。生物多様性という言葉が一般の方々には難しくて分かりにくいので、後ほど基調講演で一般の方々が納得できるよう、分かりやすくお話いただけると有難いです。話が脇に逸れますが、昨日今日新聞TVで報ぜられる熊の問題にも関心を持ちます、餌が山にない、今年は平年と異なり台風が多く列島を縦断し山の木の実が極度に少ない、人が熊の生息地域に近づいた開発が原因即ち人と熊の距離、植林によって林相が均等化した事が原因など言われますが完全に納得できる原因と対策はどうでしょうか、里に出て射殺される熊、一方、四国九州では熊の絶滅が言われ里地里山の生物多様性保全とこうした動物の関係がどうあるべきか解決を急ぐべきですね。本筋に戻って、折角のお越しです。先日、開園した武生菊人形華やかですTV放映で人気沸騰している新撰組をテーマに楽しめます、また併せて公演のOSKのおどり終止符を打たれそうな絶滅種？OSKを守れと支援に立ち上がった市民の熱意で公演することが出来ました。是非、御覧頂きますように。

最後になりましたが、シンポジウム開催までの企画・準備に携わられた関係各位の多大なご尽力に感謝すると共に、本日のシンポジウムを契機に益々活動の輪が全国へと拡がり発展することを祈念し歓迎の挨拶と致します。(挨拶概要：文責 津郷)

5 来賓祝辞 岡本光之氏 環境省自然環境局総務課長補佐)

本年3月まで、福井県自然保護課長として勤めておりまして、本日は、現職環境省自然保護局からの来賓としてお招き頂き感謝しております。

私が、福井県に参りまして自然保護行政の職責を担当するに当たり、はじめに耳にしたのが本日のシンポジウム実行委員長の津郷先生の名前でした。

何故か福井県には土木関係の方々に「僕らは土木部自然保護課だ」と私の職責を多くの場所場所で助けてくれ、不思議な感じと有難さを味わい力づけられて職責を果たせ感謝しています、この「僕らは土木部自然保護課だ」の多数の方が津郷先生の教え子だったのです、会場のここにも居ります、やあ！

私がお世話になった福井の三年間、好きな場所が出来ました、武生の白山地区の里山です、先程市長さんも話されていましたが、「アベサンショウウオ」絶滅危惧ⅠA類です、この調査確認もあり、先ず、地元の皆さんの里山に関する関心と保全の努力、人の良さに惹かれ何度も訪れました。武生では地元の関心特に白山地区の方々の人と人のネットで、生物を通した里山の人々元気なら生き物たちも元気です、人の元気がなくなると生き物たちの元気も駄目になると「人とめだかが元気になる里地里山のプロジェクト」が発足しています。このプロジェクトを通じて益々里山が元気になる事を願い期待しています。

めだかをキーワードに人と自然の共生を考えめだかに学ぶ自然をテーマにシンポジウムを企画開催されました日本めだかトラスト協会、何より中心的にシンポジウムを進行される武生めだか連絡会各位、武生市に深甚の敬意と謝意を表し祝辞ご挨拶と致します。有難う御座いました。(挨拶概要：文責 津郷)

6 表彰式

めだかの作文・絵画・写真作品等優秀作品、入選作品の紹介に続きそれぞれ部門ごとに表彰状（岩松鷹司会長名）と副賞（図書カード、国際ソロプチミスト福井より）を日本めだかトラスト協会会長より授与した。



応募作品および表彰者一覧

作文の部

氏 名	学校名	学年	作 品 名	賞
足立美保子	米子市立弓ヶ浜小	6	メダカと環境	優秀賞
落合 哲宏	藤沢市立鶴沼小	4	ハス池にかよった メダカをかった	優秀賞
中谷 勇輝	米子市立加茂小	6	メダカみ～つけ探検に参加して	入選
日高 洋輔	藤沢市立鶴沼小	1	ぼくのめだか	入選
小林 和樹	藤沢市立保野小	6	ぼくを変えたメダカ池作り	入選
古川 智康	吉野小	2	大すきなメダカ	
三井 有貴	米子市立加茂小	5	めだかを通して思うこと	
河村 優子	鳥取市立久松小	5	メダカ達から学んだこと	
日高 詩織	藤沢市立鶴沼小	5	わたしのメダカ	

絵画の部

氏名	学校名	学年	作 品 名	賞
古川 智康	吉野小	2		優秀賞
近藤 紗矢	米子市立福米小	6	メダカ池の夏	優秀賞
中谷 建太	米子市立加茂小	3	メダカみ～つけた	優秀賞
古川 惇皓	ひかり幼稚園	年中		入選
中谷 勇輝	米子市立加茂小	6		入選
岡崎 吉之助	みかど保育園			入選
小菅 咲弥香	藤沢市立六会小	5		入選
野川 美咲	北新庄小	3		入選
名幸 さくら	横浜国立大学付属 鎌倉小	5		
篠 実紀	〃	3		
松尾 涼	辻堂小	4		
広田 諒	藤沢市立鶴南小	3		
日高 詩織	藤沢市立鶴沼小	5		
日高 洋輔	藤沢市立鶴沼小	1		
落合 希美	藤沢市立鶴沼小	1		
小菅 将太	藤沢市立六会小	2		
安立 千明	神山小	4		
氏名は右の枠に記入	北新庄小	3	西じま ちか あさ川 かずとし 畠中 たつみ 大くぼかずや あさくらもとき 村田けいすけ 市川かつや 中村 まゆ かたおか ゆきの さび ゆう理 北野 まゆ 山本 りょうた太 市川 春 山口 あつし 竹内 かずま まき田 よしき 牧田 あいり 瓜生 祐磨 えとう ひかる かとう 大開 石川 みほ 長谷川りょうた 新しい ひろあき 坂口 つぐと ふくしま なおや かとう はるか	

写真の部

氏名	学校名 所属	作 品 名	賞
小泉 治和	武生市白崎町	春を待つ私のピオトープ ①	優秀賞
森 和恵	武生めだか連絡会	元気でね～	優秀賞
古川 聡子	武生市芝原	めだかがくれたもの ③	入選
津郷 勇		あみが大きすぎるよ	入選
吉田 浩	藤沢市立駒寄小	メダカを守るぞわたしたちで・・・	入選
小泉 治和		春を待つ私のピオトープ ②	
高木 克典			
秋山 謙二		用水路で力強く生きるメダカ達他	
星野 裕矢		夕日の田園	
倉田 昌宜	武生めだか連絡会	懸け橋	

俳句の部

氏 名	所 属	作 品
松原 宗弘	俳句塾・めだか	宇宙へと 人にさきがけ メダカ発つ
松原 宗弘	俳句塾・めだか	里山は 子等の遊び場 メダカ捕る
松原 よりこ	俳句塾・めだか	子供より 親が夢中の めだかとり
松原 よりこ	俳句塾・めだか	水槽の めだかの命 透けて見ゆ
伊藤 陽子	俳句塾・めだか	驚かす つもりなけれど 目高散る
塩谷 喜坊	俳句塾・めだか	それぞれに 目高ジグザグ 泳ぎして
谷口 錦子	俳句塾・めだか	川底の 澄みて列なす 目高かな
坪谷 敏子	俳句塾・めだか	澄み切った 流れにめだか 楚々として
水上 潤子	俳句塾・めだか	雲に指す 影に驚く 目高かな
薬師 千恵子	俳句塾・めだか	ふるさとや 目高とりした 友のゐて

II. 基調講演 平成 16 年 10 月 9 日 (土) 14 時 15 分～

演題 里地 里山におけるメダカをはじめとした生物多様性の保全

講師 岡本 光之 氏 環境省自然環境局総務課課長補佐)

少なくとも今も環境が残っている里地里山といふ場所は、地域の人たちと一緒に、いろいろな保全活動のビジョンを作って、合意形成を得ながら、そういった環境を維持しながら、環境学習の場として利用したり、場合によってはグリーンツーリズムやエコツーリズムの題材にしたり、地域のリーダーを育成したり、そういうことをやっていき、地域の生活を元気にしていけるか、誇りを持って生きていけるかつての地域にもとせないか、それによって、生き物たちを元気にしていく、といったことを考えています。

・どうい自然が日本にとって大切なのかということが、本で見ておいても、原体験として持っていない。それは大変な危機だと思っていて、それが第 4 の危機ではないか……

・メダカを通じて、人と自然との付き合い方、あるいは人同士の付き合い方などいろんなことを学んでいき、彼らが大人になってから、また次の世代に伝えてもらう……

それでは、つたない話ではありますがお話をさせていただきたいと思います。先ほど市長さんからもありましたが、生物多様性という言葉はほんとうにわかりづらいということですが、これはあたりまえといえますか、欧米のほうで考え出された言葉で「biodiversity」という英語をそのまま直訳をして、といいますか、訳して、「生物多様性」という言葉になりましたので、やはり日本語としてなじみづらい。いつもいい言葉はないのかと国のなかでも議論になるのですが、思い浮かびません。申し訳ありません、市長さん。で、この生物多様性保全というのは条約があるのですが、三つの多様性を保全していかなければならないということになっています。ちょっとここで堅いんですが、生態系の多様性、これは、湿地、森林、河川、湖、海などのいろんな生態系がありますが、いろんな種類の生態系を保全していかなければ人類は存続できない。次の、種の多様性はサンショウウオですとかいろいろな種の動植物が存続していけないと人類は存続できないといったことです。3つ目の遺伝的多様性というのは、近親交配が進むとだんだん遺伝的に劣化してしまうということがありますが、狭いところで少数の生物しか残っていかなくなると、血が濃くなってしまって生物が生き延びることができなくなるので遺伝的な多様性が必要になってきます。この3つをさして生物多様性というふうに呼ばれています。

これは、環境省のパンフレットのコピーですが、自然環境の保全行政とは、たとえば、国立・国定公園の保護ですとか、野生生物の保護、ビオトープを整備したり自然とのふれあい、それから、海の方や川の方の干潟の保全などそういった人と近い地域の自然との共生を展開しています。

自然公園というのは国立公園、国定公園、県立自然公園とか、福井にも白山国立公園ですとか、越前海岸国定公園、若狭湾国定公園がありますけれども、日本国土の全体の 14% は自然公園として指定・保護がはかられています。これは全国の国立公園を日本の地図にだいたい落として写真にしたものなんですけれども、私の個人的な経験で恐縮ですけども、私は環境省に入って東京の本省の仕事以外に現地の国立公園でいくつか勤務をしましたが、北から北海道の大雪山、それから中央山脈の立山黒部、山陰海岸の大山、あるいは九州の阿蘇で勤務したことがございます。写真を見てもわかりますように、日本の北の方というのは、知床の写真ですけども、例えばこの大雪山にしても氷河地形がたくさん残っていたり、亜寒帯とよばれる非常に寒いところです。私の住んでいた町もマイナス 25 度まで家の周りは温度が下がりましたが、なかなかいいところでした。それから南にいきますと、これは西表国立公園の、ちょっと見づらいですが、珊瑚礁です。これは亜熱帯に属します。ひとつの国で亜寒帯から亜熱帯まであり、これは当たり前のことですけども細長い島国ですので、いろんな生態系が多様性に富んでいます。



これは日本の地図にどんな植物が生えているかというのを大まかに示したものです。パッと見ると色が濃いところというのがいわゆる自然性が高い原生林だとか原生的な湿原が多く残っているところと見てもらえると、いいかと思います。北海道のかなりの部分ですとか、それから本州は、脊梁山地と呼ばれているところ、褐色の部分ですが、こういうところはやっぱり原生林が残っている。で、そういう風に見ますと西日本というのは歴史が古いところですから都がいろいろ移ったりとかいろいろなことがありますから色が薄い。あまり原生的な自然が残っていない。福井でもわずかに残っているのは白山のあたりくらいです。では、これで福井県は自然が豊かでないのか？決してそうではなくて、例えばこれもちょっと見づらいのですが、福井県の北部の方というのは海岸線が直線になっているんですけども、南部のほうのこのあたりというのは海岸線がものすごくぎざぎざになっています。北部は地面が盛り上がりてできた地形で皆さんご存知の東尋坊のような断崖絶壁が有名なんですけども、南部は山が海に沈み込んで複雑な地形になっています。そういったところは田んぼでも深田が多くて、ズブズブの田んぼで、それは農家の方、大変苦労されたようですけども、深く深く、泥炭という、泥の状態がたまっている層になっています。明日ツアーのある中池見も南部の方に特有の深い湿地であったところ。です。

これは、哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類などの中でどれくらいのもが絶滅危惧の状態にあるかをグラフにしたものです。日本の動植物です。哺乳類でいうと23%が絶滅危惧になっていますし、例えばあと魚類でいうと25%、4分の1の魚は絶滅危惧の状態になっている。植物といっても、普通の木とか葉っぱのあるような植物というのはやっぱり四分の一は絶滅危惧の状態にある。メダカもまさにそのひとつです。私たちが子どものころに見た生き物というのが、本当に絶滅危惧の状態にある。

これは世論調査で、物の豊かさが大事でしょうか、それとも、心の豊かさが大事でしょうか、という究極の選択肢でアンケートをとったものなんですけども、昭和40年代には両方とも同じくらいだったのが、昭和50年代になって物の豊かさよりも心の豊かさを求める人たちが増えてきます。先ほどご紹介がありましたように、私昭和30年代生まれですけど、昭和40年代には東京のかなりど真ん中に近いところでも田んぼが残っていて、私、四手網でドジョウをとって遊んだ思い出があります。そこはでして、今はビルが立ち並んでいますが、昭和40年代はまだそんな時代だった。それがあっという間に10年くらいでそういった自然というのがほとんど姿を消してしまうという時を境にして、心の豊かさを選択肢にする人が増えてきている。

自然保護に関する意識の調査結果では、年を経るにつれて、昭和60年代よりも平成に入ってからの方が、自然保護が人間が生活していくうえで最も重要である、あるいは、調和を図りながら生活していくべきである、という人が増えてきています。

いろんな種を絶滅に追いやってしまったり、あるいは、森林を分断したり、干潟を埋めてしまったり、生態系の破壊と分断を引き起こしているというのが、従来型の危機といわれています。環境省は昭和46年に発足したんですけども、そのころは公害問題と自然破壊の問題というのが大きな契機となって環境庁ができた。第3の危機というのは、これはまったく新しい概念なんですけれども、移入種、まあいろいろな議論がありますが、ブラックバスの問題ですとか、あるいは、アライグマですとかそういった外国からの動物が日本のいろんな生物を駆逐してしまうのではないかと移入種の問題と、それから化学物質で、人間が健康に被害を受けるだけでなく、生態系にもいろいろな悪影響を及ぼしているということがわかりつつあります。これらが第3の危機と呼ばれるものです。

第2の危機というのは、自然に対する人間の働きかけによる影響というふうに言われます。これは里地里山の危機といわれまして、後でご説明させていただきます。

里地里山とよく言われますけれども、いったいどこが里山なんだと、私もいろいろ、県庁の中でも、いろんな人たちから、幹部からも、ここから見える景色のどこが里山なんだという風に聞かれたことがあります。この境界線のここから向こうが里山だというものでは、実はありません。漠然とした概念なんですけれども、奥山と都市の間に広がる地域、中山間地域とよばれているところとだいたい似たようなものなんですけれども、集落の周りの雑木林や杉林とかため池ですとか田畑、水路など、人間と自然とのかわりが何百年も続く中で作られた環境。原生的な自然環境ではないので、二次的自然環境と呼ばれています。そういう場所というのは、国土の4割くらいの地域だと言われています。

これは本から引っ張ってきたイメージ図なんですけれども、まさにこういう田んぼが広がって、雑木林があって、杉林があって、集落があると。武生でもこういった場所がありますけれども、こういう場所は、典型的な里地といわれています。例えば、こういった草原の部分には、水面から水源、それから水路、畦のところが草地

になっている。そういうところにトノサマガエルであるとかそれからため池にはゲンゴロウとか、ほとんど絶滅しかけていますがタガメ、このような、いろいろの希少種がこういった場所に住んでいます。

これも人の絵を借りたものなんですけども、さっきの絵の中で、雑木林とか杉林だとかがあって、ため池があって、水田があり用水路がありますけれども、めだかのことは皆さんのほうがよくご存知だと思いますので釈迦に説法になってしまいますが、水田で卵を産み、田んぼに水を張るといろいろなプランクトンや藻が生えたりしてえさが豊富になってきて、ここで育って、そして、田んぼの水を引いてしまうと、ため池に逃げ込んだり、水路に逃げ込んだりして暮らしていくと。で、行き来しながらくらししていく。

で、サンショウウオ、いろいろなサンショウウオがいるんですけど、川にすんでいるサンショウウオがいるんですけど、こういう場所にいるサンショウウオも、やっぱり産卵するときは水の近くで産卵して、足が生えてくると山の中に帰っていくといったことを繰り返しています。爬虫類、蛇なんかは堅い卵の殻を持っていますから、乾いたところで卵を産むんですけど、サンショウウオとかカエルというのは、ぶよぶよの卵ですので、乾燥したところでは産めないの、必ず、水辺と枯れ地とのつながりがないと生きていけないという動物たちです。こういった自然そのものがなくなってしまったり、あるいは行き来が出来ないように分断化されてしまったりすると、例えば、ここに大きな道路が出来たり家が建ってしまったとか、あるいは、ここが完全に分断されてしまったりすると、生きていけなくなってしまうことがあります。人間がこういった水田やため池を作ったのはどんなに古くても1000年とかせいぜい数百年の歴史ですが、こういう生き物は何十年も何百万年も行き続けているのに、なぜ、ここにしか生きられないのだろう。人類がいなかったころもあるだろうし、少なくとも田んぼは作っていなかったはず。なぜこんなところでしか暮らせないのか、なぜこんなところに依存しているのか、ということをよく聞かれますが、こういう水田を作っている場所というのは、大昔には川の氾濫源のような場所で、梅雨や台風の時期に、よく水が氾濫をして、ジトジトの様な場所、湿地のような場所になっていて、また水が引くと周りには畦のような草場が出来ていたり、周りには森林が出来るといったことで、水が引いたり、また氾濫したりというのを、1年間を通して繰り返しているような場所が、大昔の日本にはかなりたくさんあったと思われます。で、主に江戸時代からだと思いますけれども、そういった場所というのはだいたい水田の適地ですから水田に変わっていったわけです。でも、そのときにこういう生き物は絶滅しなかったわけです。それはなぜかという、農家の方々が、一生懸命用水路の手入れをされて、水を水田に入れたり、水を落としたりしたというのが、昔の川の氾濫と同じことを図らずもやっていたので、こういった場所のこのような生き物が生き残ったというわけです。ですので、先ほど第2の危機の、人の自然へのかかわりがなくなることによって絶滅していくというのがまさにこのことで、今、なかなか農業は厳しい時代になってきていますので、水田の作業やため池の手入れなどそういったものがなくなってきて、このあたりが乾燥化していくと、こういった生き物が生き残っていけなくなる。ですので、こういった生き物は今まで農家の方々の力によって、生き延びてこられた。意識してそうしたわけではないでしょうけど、そういうことです。それが、第2の危機と呼ばれています。それは林のほうも同じようなことがいえます。山の手入れをすることによっていろいろな林があった状態を保っていないと、たとえばギフチョウなどが生き延びていけないといわれています。

かつてはみんなコンクリートで固めていましたので、行き来が出来なくなりました。ただ最近ではいろいろと自然に配慮した工法が開発されてきていますので、そういったものを組み合わせることで、いろいろ改善がなされています。ただ、人間の管理というのはそういうことではなかなか解決できませんので、来賓の挨拶でも申し上げたのですが、里地で暮らす人々の元気がなくなると、こういった動物たちの元気もなくなってしまうということになります。

これは、福井のある地域で、10年位前に県の職員が取った写真です。営農をしていたころです。いろいろな経緯があって、営農活動をやめられて10年くらいでこういう乾燥化して高い草に覆われています。水辺だとか草地だとか休耕田のようないろんな状態の場所がモザイク上に配置されていたのが、大昔の氾濫があったころの自然の状態に似ていたのですが、このように乾燥化してしまうと、非常に単純化した環境になってきてしまいますので、もちろんめだかも生きられない、他のいろいろな絶滅危惧種なども生き残れなくなってしまうというわけです。森林についても原生林のような原生的な場所ではそのまま保全していくということが非常に重要ですけど、人里近くの雑木林などでは手入れが行き届かないと密閉していきます。あるいは最近問題になっていますが、竹林が拡大して雑木林を侵食しています。こうなってくると、先ほどのギフチョウのような生き物は、いなくなっていく。それは明るい林の下にそのチョウが蜜を吸う花が咲くのですが、花が咲

けなくなってしまう。こんな様なことで手入れがなくなると絶滅危惧種が出来てしまうということがあります。

国土の4割が里地といわれていますが、その中でも今現在でも非常によい環境が図らずも残っている場所と
いうのがあるように思います。そういう場所には、いろんな偶然が重なっていると思いますが、メダカ、ゲン
ゴロウ、サンショウウオなど、いろんな希少種がごそと残っています。

国土の4割の面積をすべて同じように扱っていくというのはなかなか大変だと思います。ですから、少なく
とも今よい環境が残っている里地里山という場所は、地域の人たちと一緒に、いろいろな保全活動のビジョンを作っ
て、合意形成を得ながら、そういった環境を維持しながら、環境学習の場として利用したり、場合によってはグリーン
ツーリズムやエコツーリズムの題材にしたり、地域のリーダーを育成したり、そういうことをやっていき、地域の生活
を元気にしていけないか、誇りを持って生きていけるかつての地域にもどせないか、それによって、生き物たちを
元気にしていく、といったことを考えています。

たとえば、これは関東の方の写真ですが、休耕田を都市住民の人々が休日に作業に行き、農林業体験の場
として使っています。私も、福井で3年間棚田オーナーになっていたのですが、子どもを連れて行って、小さ
な面積ですが稲を植えたり、子どもは初めてヒルを見たのですが、田んぼの中で変な生き物がいると言って、
喜んですくって見ていたのですが、今の子どもはヒルすら見たことがない。あるいは、環境学習の場として、
使っていけるのではないかと。先ほどのグラフで最近の人たちは非常に自然保護の意識が高まっている、心の豊
かさが大切だとわかってきているのですが、例えば、私の家の周りの子どもたちを見ても、ほとんどTVゲー
ムで遊んだりしてなかなか外に出ない。意識とは裏腹に、仮想現実というか、画面中で育ってきている。私も本当
に心配なのですが、ここに写っている子どもたちは日ごろはそうやって遊んでいる子どもたちですが、これは
福井県の自然保護センターで行った田んぼの自然観察会なのですが、この写真を見るとほんとにさせられます。
それは子どもたちが、最初はおどおどしていたのが、一回生き物をすくったりするとすごく生き生きしてきて
私が子どものころ楽しんだ同じ顔をする。たぶん本能的なものだと思うのですが、今の子どもたちにもまだこ
ういうものが残っているということなんです。

福井県の環境基本計画では、そういったことを目指して、自然との共生、自然との絆を深め自然とともに生き
る福井というのを掲げています。

里地里山の保全活動というのは、農林業そのものの保全でもありますし、あるいは土木などの新しい技術、新し
い発展にもなりますので、そういった関連の施策の連携を強化して、横断的な取り組みで、地域や農地や水辺
の維持、形成や子どもたちの自然体験の機会を増加させていきます、というのが福井県の環境基本計画に掲げ
たものであります。さきほど、生物多様性の危機は3つあると申しましたが、第2の危機が里地里山の危機と
申しました。私は第4の危機があると思っていて、それは、写真にもありましたが、私たちの子どもたちが、
かろうじて私たちが持っている田んぼで遊んだ原体験、本当にメダカがすんでいる場所を知っている原体験と
いうのを、完全になくしてしまいますので、その子どもたちが大人になったとき、どういう自然が日本にとって大
切なのかということが、本で見えてわかっても、原体験として持っていない。それは大変な危機だと思っていて、
それが第4の危機ではないかと、勝手に一人で考えています。

やっぱり子どもたちの笑顔を残していくということが、人間が生きていける世の中を作っていく、それから、
メダカを通じて、人と自然との付き合い方、あるいは人同士の付き合い方などいろんなことを学んでいき、彼らが大人
になってから、また次の世代に伝えてもらうということが本当に大切なことではないかと思っています。
メダカを通じた皆さんの活動というのは、それに合致したものです。ぜひとも、皆様の活動をかんばっていただき、
子どもたちに笑顔を取り戻していただきたいと思います。

演題 水辺の伝説や民話について」

講師 大西 伝一郎 氏 児童文学者 日本めだかトラスト協会副会長)

もう一度、どうぞお願いします。本当に、メダカの里は、命の塊なんだと、あれを小さい子に見せていただいたら、その子の心の中に、一生、その美しさや優しさが、金の鈴となって、鳴響くんたということを、もう一度考えていただけたらと思います。

日本の伝説や民話はですね、川と離れては考えられない。

水辺の民話や伝説というのはどうおぼろげかといいますと、一番たくさんあるのは、水の神様、水神信仰なんです。

・メダカの池を作りますと、そこからゴキブリ生まれてるじゃないですか。トボの命が育つ、オタマジャクシが育つ、それからいろいろな生き物が育つ。

本当にこれから自然を守ろうとする子どもを作ろう、心の優しい子どもを作ろうとするのであれば、今晚から子どもたちにメダカの話とか昔話を語ってやって欲しいと思います。

今日はこういう題ですがね、どうしても皆さんにお願いしたいことがひとつだけある。それは今このメダカのふるさとを自分たちが持っているのをですね、語り手としてどうぞ子供たちに語ってやってください。あの池にはこんなメダカがおるよ、この池にはこんなよ、おじいちゃんときはこうだった。これがですね、やがて10年の後に語り部になる。民話と同じようになると思います。私は昭和35年から読書活動をしております。親子読書です。1冊の本を仲立ちにして文学の炎にあたりながら親子で本でも読もうじゃないか、これはですね、心とらぐすばらしい教育になる。

もうひとつですね、この武生の子どもは非常に幸せだった。それは3年ほど前にNHKが特集したんです。そのときにですね、非常に綺麗なメダカが出てきました。メダカが棲んどるところが映りました。皆さん、目を閉じて考えてみてください。皆さんの心の中に、あなたのふるさとの山河がですね、メダカが泳いでいるところが、今皆さん映ると思うんです。しかし、これからですね、10年、20年の後にはですね、パソコンでしか出てこんのはいかなあつと、こう思ひましてですね、そういう運動を行っております。こんなところにお世話になりましたのは、実はですね、読書活動は45年なんですけども、自然にかかわったのはちょうど40年です。日本にはニホンカワウソというのがいましてですね、昭和40年に一匹のマツというニホンカワウソに道後動物園で会うんです。これがまたすごいなあと思ってどんどんどんどん訪ね歩いてそのうちにですね、人間がだんだんだんだんだん少なくなるようになってきます。自然を破壊してですね、全部、自分たちも子どもたちもだめにしようとする。僕はメダカのときに、退職してすぐ中村さんと四国生き物ネットワークというものを設立しました。四国はですね、一つであるのに、なんと4県に分けてこっちはなんじゃからあつちはなんじゃと、とんでもないことをやっているんですね。クマタカは飛びよるじゃない。クマタカ保護のためにはですね、四国が一つにならなきゃだめじゃないの言うて、ほとんど中村さんがしてくれたんですけど、僕はですね、ネットワークの会長でですね、大声掛け合ひまして、一番だめなのはですね、県の行政です。でね、そういう風なことを考えながらやっぱりですね、僕は子どもたちにメダカを通して3つのことをしてもらいたいんです。ひとつはですね、われわれの祖先は今までですね、柿の枯れ残った枝に熟柿を一つ残したんですよ。それは渡り鳥のために残したんですよ。思想はどういうことかという、人間も自然の一員であると、こう考えたから柿を残したんですよ。だから、21世紀に生きる子どもたちに、ぜひ残してほしい。だから、林真理子さんと片岡鶴太郎さんと2000年に講演したときに、僕が申し上げたのは自然を残してくださいと。これがひとつです。

それからですね、絶滅していくものは、己の身を滅ぼすことでしか環境を訴えることが出来ないんです。だからですね、どうしてもこのことを子どもたちに伝えていきたい。

3つ目はですね、今申し上げましたように、本当に生きた魚を、びんぴん跳ねるアユを、手のひらに乗せて見たことがあるかどうかと。すべてですね、1枚のガラスの向こうに泳いでいるか。これはですね、なぜメダカ



トラストをはじめたかという、中村に杉村さんという、とんぼ公園つくった人、すばらしい人なんですけど、その人のところへ、絵本書きに行って、そこのプリンスホテル泊まったんです。そしたらぐるぐるぐるぐる川魚の綺麗なのが回ってるんです。もう感動してですね、フロントの人にすごいねえ言うたら、あれはフィルムや言うんです。そうすると、ガラスの向こうのものはもうほとんどにせものやおもったらしいと。本当に原風景として残していくとしたらですね、やっぱり子供たちに、川に入って、メダカすくったり、メダカがいるということがどれだけ幸せかということがわかる。それが子どもの心の中に一生、金の鈴となつてなりひびくんだと。そういうことから考えたらですね、メダカ池のそばに3人来たっていいんですよ。その3人の子が見て一生自分の心の中で自分を大切にしてくれたでそれでいいじゃない。

それから、年寄りの人たちにはですね、あなたたちにどうしてもしてもらいたいことがあるんです。それは、あの池にですね、あるいはこのあたりはメダカが泳いどったんやと、こう言ってほしい。こういうことをお願いしたい。

日本の民話というのは、今村博士がおっしゃったように、農耕民族だったんです。だから、日本の伝説や民話はですね、川と離れては考えられない。昔話で申しますと、桃が流れてくるのは川ですし、一寸法師が流れていくのも川ですね。全部川なんです。だから、私たちは水とか川とかそういうことを中心にして伝説や民話を残していきます。それから日中韓の子供たち100人に宮沢賢治の里で、絵本劇をさせたんですけど、その時に、アジアの昔話の中で、共通なものがたくさんあるんです。それは同じなんです。そういう風にして、伝説や民話を語り継いでいったんだと思います。

水辺の伝説や民話についてももう少し話を進めますと、民話の中に民間の神話というものがあります。伝説というものがあります。民話と昔話は同じです。それから動物昔話、笑い話、世間の話、こういう風になっていきます。民話というのは作者がいない、たくさんの人が願いを込めて語り継いでいったから、口承文学というのですが、その口承文学というものは、順々に語り継がれていったものですから、地方地方で全部違うんですね。例えば福井の舌切り雀は、牛馬の洗い桶の水を飲まされるんです。ところが他では草むしりだったりするんです。その中で、何を私たちに教えたかという、本当に愛情のあるものはどんなもの乗り越えてでもそこにいくんですよ、ということです。

この人たちは幸せだなと思うのはですね、我々集まったものだけでなく、少なくとも子どもたちには、金の鈴をひとつずつ渡していることになるんだと、こう思うんです。

その次は伝説。伝説とは村の中で場所が特定されている。岩の話をする、「あの岩が」と言うふうがいい伝わるうちに、それが伝説となる。動物の話は、そういう話だし、笑い話は、きっちむさんを知ってると思うのですが、とんち話でお殿様をやっつけるとかですね。形式譚というのは寝物語によく聞きました。皆さんもご存知かもしれません。子どもと人間との間に親しみを感じていったのが、民話、伝説なんです。

さて、その中でですね、水辺の民話や伝説というのはどうはたらくのかといいますと、一番たくさんあるのは水の神様、水神信仰なんです。我々は水を非常に大事したからですね、水の神様にまつわる話をしたわけです。その中でも、竜の目玉というのはたくさんあります。あるとき、若者が働いておったら、綺麗な人が来たのでお嫁さんにする。しかし、絶対覗かないでといって、子どもを産んで幸せに暮らしていたらですね、覗きたくて仕方ないからですね、覗くとですね、そこに竜が、大蛇が渦巻いている。それで、見られたからということで、帰る。男は竜王になる。それで水辺にお乳が欲しくて泣いている赤ちゃんを連れて行くと、水の中から竜が出てきて、あなたは約束を破ったけれど、私の子どもだから、これを口の中に入れさせといてくださいと言って、ポンと投げたのが竜の目玉なんです。それからもう一つはですね、水というのは恐ろしいということですね。皆さんはよくお聞きになっていると思うんですけども、人間と動物が一緒のときに人間は雨乞いをするわけです。すると蛇はですね、それを聞いてあげようと。しかし聞く以上はあなたの娘を一人嫁にくれと、こういうわけですね。それで、一番上の姉に言いますと、いや行かんと。二番目の子にいうと、私もいやと、すると、三番目の子はお父ちゃんがそんなに困ってるなら私嫁に行くわと言って、天狗平のところへ行く。しかしお母さんはつらくてたまらないから、花嫁衣装のところへ糸をつけてスーッと行って竜の家へ、大きな淵の中へ、入っていく。するとそこへ、お経を投げ込むと、その娘は助かる。それだけじゃないんです。そういう風にした娘はそこで助かったら、おばあさんの面をもらってですね、やがて庄屋の飯炊きの女になって、すると、みそめられてしまう。おばあさんの面をかぶった女を風呂に入れると、非常に美しい娘になって、シンデレラのように暮らしていく。だいたい、水の神様の雨乞いに対する話なんです。それから、もう一つ、非常に多いのは、河童の話です。河童というのは大体大きく分けて4種類あるんです。1つはニホンカワウソのようなカワウソなんです。

だからカワウソの恩返しというのがありますけれど、それもいっぱいあるんでしょうけども、カワウソが出てきて、それでそれを捕まえようとしたらどうぞこらえてください、明日から毎日魚を届けますから、というのがだいたい日本に50くらい伝わっている河童の恩返しなんです。これは実に巧みに作られているのは、川の横にはニホンカワウソがたくさんすんでいたんですよ。それから、1番最初に、私が道後動物園でマツにあったとき、マツというのはカワウソなんですけども、調子に乗ると頭の上にわらを乗せて踊るんですよ。それから、写真集にはラッコのように上を向いて泳いでいるのも入れましたけれど、実に、周りにニホンカワウソがいたと。これが、大正15年に捕獲禁止になってから、昭和20年から大体20年くらいで197頭出てきて終わりになるんですけども、まずですね、河童というのがあったんですね。それは人間も動物もともに生きていますよという印なんですけども。それからもう一つは、水木さんのタイトルに妖怪があるんですね。妖怪はですね、暗いところにいて、不思議な生き物なんです。これは川というのは恐れ多いものだ。河童の中には川の淵を泳いだら肛門を抜かれるという話がいっぱいあるんです。それが危険だから泳がないようにという教えなんです。雨乞いとか河童とかいうようなもの、特に河童がきちんと出てきたのは、20世紀に入ってから、柳田邦夫さんが、語り手と聞き手によって、記録を始めたのが、河童が一番はっきり出てきた。実際に九州には人間と同じような河童のミイラがありますけれども、神さんをまつとすると。これらをみんな合わせますと、やっぱり人間が水とともに生活してきたんだと。

で、ずっとメダカを調べていたら、2つだけメダカの話があるんです。それは何かというと、田の神の使いとしてメダカがいる。メダカは田の神様の使いなんです。桜というのはもともと一番最初に咲くから桜になっているんですけども、農耕民族として、そういう風な、メダカを使者にしたり、それから、日本文化というのはこういう民話や伝説でたくさん残っている。それを子どもたちに聞いてもらいたいのに、西洋文化が入りすぎたんです。西洋と日本の違いというのは、日本人は自然を大切にして、自然とともに生きていこうとしたから山ふところへ家を建てたんです。農耕民族ですから、納屋をあけると水田の稲が入ってくるようなところに建てるんです。お墓だつてご先祖さまどうぞ見守ってくださいといって、水けが見える高台にお墓を立てたんです。ところが、西洋は70m/sの風でも80m/sの風でも人間は負けないぞということを言って、下から上げていった。そういう意味でももう一度、めだかを見直してほしい。しかも、ここのように、メダカの池を見直して欲しい。それは、メダカが泳ぐだけじゃなくて、あそこにポツポツポツと命の塊が出来るんです。メダカの池を作りますと、そこからヤゴが生まれてくるじゃないですか。トンボの命が育つ、オタマジャクシが育つ、それからいろいろな生き物が育つ。ところが、こういうことを少し反省してくれて、愛媛県の、土地改良をする人が、メダカのすむ方法を教えてくれといって、よく来るんですけど、もう一つ恐ろしいことを始めたのがですね、エコ・トーンをはじめたんですよ。池からおたまじゃくしが上っていく水路をばっと切ってしまった。何で切るかというと、コンクリートで切るんですね。じゃあ、もう池のものは上に這い上がれないじゃないですか。だから、あの辺には水辺の伝説がいっぱいあるんですけども、天の松原から天女が舞い降りる砂浜で海水が還流してきれいにして戻していく。瀬戸内海がどんどん汚くなっていく。こういうことを考えていただきますと、ぜひ皆さんにお願いしたいのは、何でもいいですから、昔話を、水辺だけじゃなくていいですから、語ってやって欲しい。必ずそこには、人間と動物が一体となって生活している。みんな、民話や伝説については願いがこもっているんです。例えば、こぶとり爺さんというのがありますね、天狗が8人踊っている。じっとみていたら、自分もあの中に入りたい。だから言うんですね。てんぐてんぐ、8てんぐ、おらまで入れて9てんぐ。と言ううちに、こぶが取れるという風になっていく。こういう風に、動物と自然とが一体となって生きていく。つまり、自然と人間が1つになっていく。こういうことから考えてたくさん水辺の民話や伝説をしっとらなあかんのです。早い話がね、ドンブラコドンブラコ言うのを知ってるでしょ。ところがうっかりドンブラコドンブラコ言うたらですね、それ何というんで、結局はですね、話とかそういうものを語って行って頂きたい。それと同時に、やっぱり、ぜひ本当にこれから自然を守ろうとする子どもを作ろう、心の優しい子どもを作ろうとするのであれば、今晚から子どもたちにメダカの話とか昔話を語ってやって欲しいと思います。たくさん、こんな本を出しまして、これはあの、福井県にもありますけど、愛媛県の民話を編集して、毎日出版文化賞をもらったんですけど、愛媛県の民話を片っ端から調べて行って、その中で残していきたい物を残したんです。福井県にもあります。その中に河童の恩返しも入っています。ですから、もう一度、こういうものを見ていただきたい。

もう一度、どうぞお願いします。本当に、メダカの里は、命の塊なんだと、あれを小さいこに見せていただいたら、その子の心の中に、一生、その美しさや優しさが、金の鈴となって、鳴り響くんだということを、もう一度考えていただけたらと思います。ありがとうございました。

Ⅲ. 分科会報告

分科会 15 30～17 30)

第1分科会

学校バイオ・トープの創造と教育」～この児らの瞳の輝きに応えつつきたい！～

開催日時 平成16年10月9日(土)

会場 福祉健康センター(アル・プラザ武生4F)多目的ホール

コーディネーター

西野 薫 氏(鯖江市立待小学校 校長)

パネラー

五十嵐 実 氏(学校法人 日本自然環境専門学校 校長)

川地 啓文 氏(藤沢メダカの学校を作る会)

井上 哲夫 氏(ビオトープ管理士)

野川 千秋 氏(立待小学校理科担当教諭)

活動報告

立待小学校

川地 啓文 氏(藤沢メダカの学校を作る会)

分科会要旨

立待小学校の児童

ビオトープができるまで

鯖江市に働きかける

NPO 団体の協力と市の環境基本計画に適合して公共事業に認定

ビオトープの様子

田植え・稲刈り・草刈・みぞ堀・観察

低学年はカリキュラムで、高学年はクラブ活動で行う

憩いの場として利用

自然と触れ合うことの喜びを知り、昔の自然への思いを養う場

NPO の井上さんの話

設計・下請けを担当

土建屋にはまだビオトープに関する知識が浅いので単独では任せられない

製作には知識者・高専の学生など地域の人も加担

公共事業に認定されたことで、永続的にかつ、高いレベルのビオトープができる

二次的自然(人為的介入を要する)を複製することを目的にしている

材料には工事の残土などコストのかからないものを利用

五十嵐さんの質問(立待小学校に対して)

ビオトープに関するルール、管理の頻度について

(ルール) 壊してはいけない

(管理) 毎日の観察会で気づいたときに行う

五十嵐さんのところでは

(ルール) 外来種の持ち込み・餌をあげることの禁止などを立て看板に

(管理) 一年に一回、地域の人と

藤沢メダカの学校の取り組み

小中学校の教員が中心となって、行政、水族館、大学、一般企業を巻き込み、地域一体となって藤沢メダカを繁殖させ、環境学習の教材としている

繁殖させたメダカを地域の池に放流したり、地域の人に分けたりしている

遺伝子の保存を考慮し、藤沢メダカ同士をかけて藤沢固有のメダカを残している

質問

ビオトープの安全管理について

子供にも安全なように池の水深を浅くし、勾配を緩やかにしている

学校ビオトープでは、教員の監視下でのみ池に入ることを許している

ビオトープを通して子供はどう成長したか

生き物の気持ちになって考えられるようになった

子供達自身がビオトープに関するルール作りをするようになった



第2分科会

めだかの棲む自然環境の保全」～めだかや小さな生き物の生息地が減っていく!～

開催日時 平成16年10月9日(土)

会 場 福祉健康センター(アル・プラザ武生4F)大会議室

コーディネーター

奥村 充司 氏(福井工業高等専門学校 環境都市工学科 助教授)

パネラー

西江 重信 氏(沖縄県本部町 グループエコライフ、日本めだかトラスト協会理事)

坂田 正宏 氏(福井県自然保護課・技術士(建設環境))

笹木智恵子 氏(NPO法人ウエットランド中池見 理事長)

磯野 泰子 氏(武生市環境審議会委員・武生市都市計画審議会委員)

分科会要旨

コーディネーター奥村氏の開会挨拶の後、各パネラーより一言ずつ自己紹介があった。

事例発表1. 城山エコミュージアム実行委員会の活動(磯野泰子氏)

城山エコミュージアム実行委員会を組織し、

- ・自然観察会の実施
- ・地区の文化祭で生き物展示(水槽による魚展示および写真パネル)
- ・福井県知事宛に自然保護要望書の提出
- ・自然観察マップの作成
- ・H16.6に県、地元、実行委員会の三者会を実施したが決裂
- ・H16.7に知事と「座布団集会」開催
- ・県は要望内容を不可と判断

この活動の反省点として、(1)活動開始時期が遅かった点(2)地権者の協力が得られなかった点(環境より圃場整備を優先する地権者を怒らせてしまったこともあるなど、コミュニケーションの不備)などを指摘した。これに対してのコメントとして

笹木氏:中池見も同じ経緯を辿ってしまった。住民への情報は入りにくく、知ったときには工事は始まっていて遅いことがある。

坂田氏:環境アセスメントについて、定義の説明を行った。農家とは地権者であり、里地里山の自然を知っている人、管理している人である。

西江氏:今のアセスメントは不備があり、工事を差し止めることはできない。

聴衆から脇本氏(福井県土木部)の意見:これは、道路行政の問題ではなく、農業の問題である。コンクリートの水路化は地元から挙げられている条件工事である。

西江氏:誰もが「悪」ではない。皆が精一杯やってきた歴史である。

笹木:鯖江市生まれで、子供のころ鯖江の河川で遊んでいた。中池見のパネルを持って「大事にしなくちゃ」と全国を行脚している。強政策は取ったことはなく、のらりくらり坦々とやっている。

コーディネーター:生物調査はどのように行ったか?

磯野氏:若手の研究グループ(うてな)を主体として、福井高専奥村研究室学生の協力を得て実施した。

コーディネーター:住民参加の力で調査活動

坂田氏:公共事業発注者として、私なら知らなかったことを地権者に謝罪して、改めて取り組む。水路の維持・管理が大変であったら、それなりの手当てをしなければならない。

笹木氏:私たちは中池見でボランティアの力を借りて江ざらいを行っている。

一般質問、田中謙次氏:城山で関わってきた子供たちの反応は?

磯野氏:3回目の観察会で子供たちの意見として「めだかを初めて見た」、親の意見として「子供たちがうれしそうでよかった」というのが多かった。地権者7軒あるが、その地域の子供は見たことがない。市街地(社地区)の子供たちがタモを持ってやってくる。

奥村氏:そのとき、子供たちの目は輝いている。

脇本氏のコメント:「私作る人」vs.「私食べる人」の関係から「農家」と「まちの人」が一緒になって「楽しむ」ことが大切。県の事業担当者として、本件について検討していきたい。

西江氏：地権者が7軒なら、じっくりやれるはず。奥村先生のような人を緩衝役として話し合って欲しい。

事例発表2. 中池見湿地における活動（笹木智恵子氏）

中池見湿地は敦賀市の檜曲にある袋状埋積谷である。自然環境と人の営みが調和していたが開発計画が持ち上がった。ここを破壊する課はあるけれど守る課はひとつもなかった。そこで、トラスト運動に発展した。これは唐傘連判状と同じで、誰が頭かわからない組織である。1990年大阪ガスが10年延期を決定した。10万年の泥炭層は思った以上に深かった。

願いとして「子供たちが遊べる場のままであってほしい」

希少種：ミズナラ、デンジソウ、ヒメビシ（5年ほど見かけない）、ミズアオイ（日本産）

トンボ70種類。今後ラムサール条約への登録を目指している。悩みとして、移入種が国道8号線バイパスから入り込んでいる。2005年5月に敦賀市のものとなる予定である。

坂田氏：「10年続けると周りが変わってくるぞ！」

磯野氏：「中池見を御手本にして価値誘導を続けて行きたい」

坂田氏：（技術者として講評）一つ一つの情報をつないでいくことが重要。事例紹介として武生市河濯川における市と住民参加によるワークショップを通し、現場課題を克服していった事例を紹介。①農業用水管理者との問題をそれぞれの立場を理解しながら解決した②護岸における植生、土壌安定のため廃材利用（畳表の有効利用）した。

最後に一言

西江氏：日本は美の国、共生の国、日本は西洋の心にはなれない。伝統文化を大事にしながらやっていけるのではない、世界から羨ましがられる国になれる。文化的な創造力なくして、連合はない！

坂田氏：自治体の土木技術者の責務について。食糧事情から安易に田んぼはつぶせない。

磯野氏：あきらめないで続けることが大事！

第3分科会

めだか飼育者交流会」～めだか飼育をとおしてネットワークの輪を広げよう！～

開催日時 平成16年10月9日（土）15：30～

会 場 武生市葛岡ビオトープ・牧ビオトープ・その他（バスで移動）

コーディネーター長谷川 巖 氏（環境省希少野生動植物推進員・市囃託里地里山専門員）

ウキクサ、ミズオオバコ、クロモ、放置している。ただし、ホテイアオイなどの外来種も入ってきている。クロメダカしか入っていない。日が当たると温かいところへ出て行く。雨が降るとタモロコ、ギンブナ 子ども会で釣堀、準工業地帯で、埋めてしまっても構わない。土地が埋まっていく。南越新幹線駅や8号線バイパス建設によるもの、ザリガニが増えている。ザリガニゲット作戦。タニシ、ドブガイ、キクモ、ミズオオバコ、子供たちにスルメで釣らせている。



葛岡ビオ・トープにおける長谷川先生の説明



おたふく食堂 松原さん



しらやまめだかの学校牧分校



武生市若須町 瀧見 修洋さんのお宅にて

第4分科会

「見つめなおそう里地里山の生態系」

～めだかをキーワードに里地里山の自然を見つめなおそう！～

開催日時 平成16年10月9日（土）

会 場 武生市生涯学習センター 4F 第1講義室

コーディネーター

森 照代 氏（丹南地域環境研究会）

助言者

竹田 純一 氏（里地ネットワーク）

パネラー

高津 琴博 氏（NPO法人田んぼの学校越前大野 学校長）

稲葉 洋 氏（しらやま振興会 自然環境部長）

岡山 公雄 氏（国土交通省 大和川河川事務所 副所長）

鈴木 正貴 氏（福井県土地改良事業団体連合会 環境計画課）

観察発表

白山小学校（白山小）

武生第五中学校（武生五中）

分科会要旨

はじめにコーディネーターの森氏からパネラーおよび助言者の紹介があり、本分科会では、里地里山の現状とそこにくらす生物環境の変化についての取り組みの発表、意見交換を行う旨の挨拶があった。

はじめに、白山小学校の児童、続いて武生市第五中学校の生徒達による水辺の生き物調査活動に関する発表があった。その中で、総合学習の時間に小学校近くの天王川を調査し、カワニナ、ドンコ、ドンコの卵、アベサンショウウオに驚いたことやインターネットでこれらの生物について調べ、保護活動がなされていることを知ったことについて報告があった。安養寺町ではドジョウ、メダカが生息しており、休耕田には何種類ものカエルや昆虫がたくさんいて嬉しかったこと、ザリガニつり（ザリガニゲット作戦）を行い、ため池でたくさん取れたことなど報告があった。さらに、ビオトープづくりを専門家の指導のもと6月末に実施し、1ヵ月後にはビオトープらしくなったこと、アベサンショウウオなど多くの生き物が観察されたことが報告された。次に、夏休みの聞き取り調査（明治・大正・昭和・平成）では、トノサマガエル、アマガエル、ツチガエル、ゲンジボタルがたくさんいたこと、近年、アメリカザリガニが増加したこと、メダカ、コオイムシ、ミズカマキリが減少しており、人間の活動が関わっていることを指摘した。また、自宅周辺の生き物調査ではアマガエル、アメリカザリガニ、クロメダカが観察された。生き物にとって暮らしやすい環境とはどのような環境であるかについて学んだことが報告された。里地ネットワークの竹田さんや自然保護センター松村さん、村山さん、長谷川先生、武生市の増田さんやしらやま振興会にお世話になった。今後は川やため池休耕田の生き物について調査していきたいとのことであった。

次に、武生第五中学校環境調査隊の発表があった。

白山にはどういう生き物がいるか、自然はどうなっているかについて現地調査、インターネット調査、聞き取り調査を行い、以下のように報告した。生物調査は、学校周辺の溜池や森林で行い、ため池近くの水路にはアベサンショウウオ、ヒダサンショウウオが見つかった。天王川で採集した生物としてカジカ、ドンコ、ユスリカ、タニシなどがあった。聞き取り調査は夏休みに実施し、3枚の地図にアベサンショウウオ、メダカ、タガメ、ゲンゴロウ、ハッチョウトンボなどを分布図として示した。また、カードも合せて作成した。この結果から、貴重な生き物が近くにいてとても驚いた、アベサンショウウオをもっと増やしたいなどの感想が寄せられた。次に、メダカについても調べた結果、大きな道路が通っている周辺にはいないこと、アメリカザリガニが広く分布し、ブラックバス、ブルーギルが一部に移入されていることなどが明らかになった。アメリカザリガニはウシガエルのえさとして持ち込まれたものが全国に広がり、この影響で白山でもメダカが減少した。そこで、アメリカザリガニを減らしたいという気持ちが芽生え、犬の散歩時にザリガニを釣って犬に食べさせるなどのユニークな報告があった。白山は貴重な里地里山で絶滅危惧種もいる。しかし、移入種により減少している。釣り人などが移入種を持ち込むことを禁止するなどの対策が重要であり、里地里山の生態系を維持して行くことの大切さを訴えていた。

竹田氏より白山地区の里地里山環境についての解説があり、環境省の里地里山保全事業に選定された全国4ブロックの1つである武生西部地区は生物多様性が高く、アベサンショウウオがいるかないということ以上に生物種が豊であることが貴重であると指摘された。また、メダカの減少とザリガニの増加について調査しているが、次年度も活動を継続的にされることを期待するとコメントがあった。

次に、パネラーの活動紹介があった。

高津氏は大野市で田んぼの学校をされている。そこは、最初の区画整理実施地域であるが、時代は逆行し始めている。当該地域では絶滅危惧種が発見されていないけれど、りっぱな里地里山である。そこでの活動事例の紹介があり、農作業体験・福祉イベント・都市と農村の交流事業を挙げられた。水路の生き物調べ（U字溝）では、マシジミが高密度で発見されたことや赤とんぼの幼虫を観察し苗一株に一匹、稲一株2600粒、ご飯一杯4312粒で赤とんぼ2匹が育っているなど、次の世代に対して食卓と赤とんぼは繋がっていることを訴えている。また、田んぼの生き物観察、わら細工体験、あぜ道の自然史（草刈作業）、こどもの頃の道草体験、堆肥のカブトムシ、田植え体験、身近な素材を利用して循環型社会について考えさせていることも報告された。次に、しらやま振興会の稲葉氏より地域は過疎化が進んでいる。自然環境が減少しているが、とくに山田（山の中の田んぼ・・・過疎地で荒れる）について危惧しており、地域振興事業として我々の手でしらやまをどのように整備していくかを模索している。自然環境部として、自然環境の保全、環境の美化、リサイクル運動を推進し、環境省より里地里山保全事業の対象に選出されたことを受けて長谷川巖先生にアベサンショウウオ学習会を開催して頂き、生き物調査やビオトープづくりを実施した。現在も、畦だけ塗って水を張っている。それを核として、裏山の遊歩道の整備を計画中である。力まず自然体で、農業を楽しみながらゆっくりと時間をかけて行いたいと説明があった。

また、岡山氏（国土交通省）より明石海峡公園について説明があった。淡路地区土取り場の跡地活用とあいな里山を保全する事業を実施した。神戸市の西区、北区は標高300～400mの丘陵地で開発が進み、あいな地区は少子高齢化、営農後継者がいないなどの問題を抱えている。地域が参加して公園を作り続けていく、参加してもらうためにあいな里山プロジェクトを立ち上げ、里山通信を発行している。当初は国が主導であったが、炭焼き、道作り、宝物発見などに対して市民参加のまちづくり経験者、企画運営係、専門家が集まってサロンを開催し、そこが中心となって、あいな里山サロンニュース、子どもたちの自然との交流、子ども国際ワークショップなどに取り組んでいる。

次に、鈴木氏（福井県土地改良事業団）は栃木県で農業土木の研究室の活動について報告し、農業、水質悪化などの経緯を踏まえて、圃場整備をしながら生態系を保全できないか？

という課題に取り組んでいる。メダカはフナ、ドジョウ、タモロコと同様に水田環境の魚であるが、用水路、排水路など落差の問題をいかに解決するかが課題である。圃場整備は農家にとっては水管理が容易であり、畑作転換の恩恵もあり、事業を進めざるを得ない。これらを両立させられないか？頭首工を遡上できないサケ、マス対策と同様に、圃場整備のあとの水田に魚道を設置したところ、ドジョウは水田と水路を往き来していた。また、両生類であるカエル（トウキョウダルマガエル、トノサマガエル）の減少について、越冬場所である山際、河川において冬場に圃場整備を行った場合問題が発生する。U字溝に蓋をすることを試行した。このように、ハード面においても工夫次第でさまざまな対策が可能であることを説明された。

竹田氏のコメント：田んぼの学校では、稲作あたりの生き物の数により、稲作と生き物との関係について理解させるという取り組みがある。しらやまでは集約営農、共同体を作りながら環境保全との両立を目指して活動しているが、稲葉さんの応援団、地域のサポーターが必要である。11月には環境省や農水省、県の人と話し合いの場を設ける予定である。

鈴木氏：農業土木ではドジョウ魚道などいろんなことが出来る。汗をかいて、一緒に何かする交流会が必要である。

高津氏：子供たちは基地を作ったりして遊びを見つける。リピーターも出始めている。管理ってどういうことなのか？プレシンポで管理について発表したけど、あぜ道の草刈は年に4、5回を延々と続けている。カタクリが何故咲いているか？草刈の管理の意義を理解して欲しい。楽しみながら循環型社会を学ぶことが、ほんとうの管理であり、多くの参加者やリピーターはどうすれば可能かについて模索中である。しかし、里地里山は民有地が多く里山を作り変えることは時間的な面で困難で、不耕起水田の取り組みはパイプライン化されていて厳しい。

岡山氏：公園内のし尿処理はその場で行ったり、手作り掲示板、太陽と緑の道、あいな耕作クラブ、炭焼き窯、

常設サロン、ルールサロンなどを実施している。あいなにいる生物を守るためにはなどのルールを作る人の輪が大事である。(竹で作った楽器、歌を作る、スイカ)「いろんな人に活用していただく！」道路整備について国土交通省に対する意見を聞く場ともなっている。

稲葉氏：35年前に土地改良され、谷の山田が荒れ放題・放置される運命になった。機械が入れるところしか耕作できない。安養寺町ではサギソウ王国や市民参加の森作り、休耕田をゲンゴロウ池にする活動が行われており、萱藪となることを防いでいる。地区の人の意識付けが大切で、しらやま地区において、自分達の田んぼがどのようになっているか、地元環境意識を高める必要がある。

森氏：宝物として認識していただくということですね。

鈴木氏：10月6日農業新聞に水田の機能、ブランド化について規定を設けるという記事があった。農水省も考えている。どういった生き物がいるからどういう価値があるのかという基準化については暗中模索である。高齢化により崩壊寸前の水田生態系の価値を理解し、金銭的支援を惜しまない人たち、里地作りをする人たち、すなわち、「理解してくれる人づくり」として田んぼの学校など活動の意義があり、里人を増やすことが大切である。都市住民が金銭的援助をすることが大切で、農家だけに任せるのはダメである。

会場から一般質問：

愛知県：圃場整備による農家メリットはあるが、生態系保全の意識理解があるのか。開水路の管水路化との整合性はどのように考えるか？

鈴木氏：はじめから理解があったわけではない。現地に研究室が入り込み、何かいて、どういう状況か？圃場整備するとどうなるかを報告。生活史、名前を知らない・・・地元発見の手助け・・・生き物へ影響を認識・・・何とかしてほしい・・・地元への熱心な働きかけが大切である。管理面では用水路のパイプライン化は仕方ない。排水路、河川のネットワークを考慮して、生態系と営農面の折り合いをはかる。

石川県から：脱サラで休耕田を買った。草が多かった。害虫、野菜、稲の茎、農薬は使わない。周りには使用している。農薬で生物が絶える。いいものを食べたい。水の汚染。ある意味里地里山保全を行って農業が成り立つか。環境保全の立場と営農の立場から稲葉さんはどのように考えておられるか？

稲葉氏：土水路の多い山田に生物がいる。山田については農薬はやっていない。田舎にいてビオトープは必要か？通常、農薬は使用している。

鹿児島県のメダカの学校：荒れた休耕田、棚田を広域市町村合併のよい機会に利用する。地方の中核的な都市が一つの市としてやっていくために合併する隣町の棚田（ヨシ、ガマの穂）を都市の住民と高齢の方々が参加して管理。都市住民と高齢化した農村とが力をあわせて。パートナーシップを醸成させていく。活用の一つの手段である。

最後に

竹田氏：これからの活動、里地里山保全に対するヒントコメント

- (1) 牛乳の殺菌法はヨーロッパにおいて低温殺菌、日本は高温殺菌
- (2) 農薬・化学肥料の使用量・・・ヨーロッパでは土壌のことを考えて少なくする努力、に対して日本は安全のために多く使う
- (3) ドイツ近自然工法、農水省も今後の事業は環境を配慮する
- (4) 里地里山の概念、生態系というキーワードが推進力となってどの程度地域を変えることが出来るか？
- (5) 環境と経済の関係は逆転するのはいつのことか。急激な変化を伴う
- (6) しらやま・・・地元学、全集落、ザット（ザリガニ撲滅）ある日一気にやる。いる場所がわかったら全地区で。モデル的にやってわかったら一気にやる！





IV. 語り部の会による市中案内

語り部の会は、武生市生涯学習センターの「武生の歴史講座」（平成4年・5年）がきっかけとなって、平成6年8月に「武生の語り部」として7人で発足しました。現在会員数は17名で、武生の語り部を養成して歴史的遺産の豊かな「武生」をたくさん紹介していきたいと考えています。分科会活動の後交流会までのわずかな時間でしたが、遠方よりご参加頂いた方々をもてなすために、会場周辺の武生歴史探訪をご案内頂きました。



V. 交流会



記念撮影



アトラクションの越前万歳



提供 : キリンビール飲み放題



アトラクションのヨサコイ



全員で記念撮影

VI. バスツアー

第1 コース

「学校バイオ・トープを見に行こう」 バスにて各バイオ・トープへ移動

開催日時 平成16年10月10日(日)

会 場 立待小学校～福井社西小学校～家久浄化センター

案内人：井上 哲夫 氏 (バイオトープ管理士)



移動のバスの中



立待小学校バイオ・トープ



社西小学校バイオ・トープ



武生市下水処理場めだかバイオ・トープ



第2 コース

敦賀中池見へめだかを見に行こう」移動中池見のビデオ学習

開催日時 平成16年10月10日(日) 会場 敦賀中池見, 案内人 笹木夫妻



第6回 全国めだかシンポジウム

in 菊香る越前武生 16.10.10 (大野の水を考える会 寺脇 敬永さん撮影)



① 生市役所前から3台の観光バスで中池見へ



② 出欠確認



③ 中池見到着



④ 概略説明



⑤ 葦が広がる



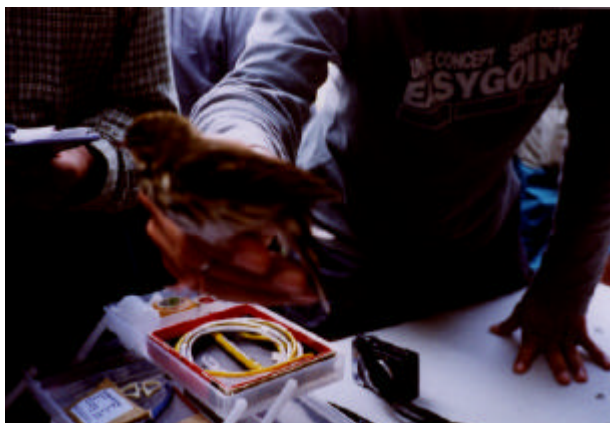
⑥環境省渡り鳥調査 かすみ網で捕まえ足にワッカ



⑦ 小川が5本ある。ここにメダカがいる。



⑧ この鳥は19.5グラム、体重を測る。



⑨ ワッカをつけて後で放す



⑩ ここで中池見のなりたちのビデオを買う



⑪ 大阪ガスがつけた電線が所々にある。



⑫ 笹木智恵子さんの説明を聞く参加者



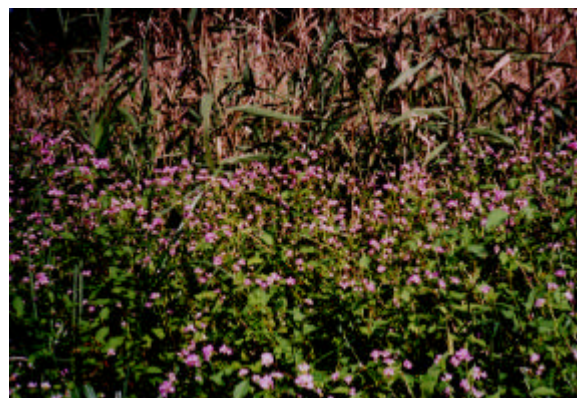
⑬ 長靴隊と短靴隊に分かれて進む



⑭ マムシが出るので注意との看板あり



⑮ 所々でメダカの学校を見ながら進む



⑯ コンペイトウの花真っ盛り



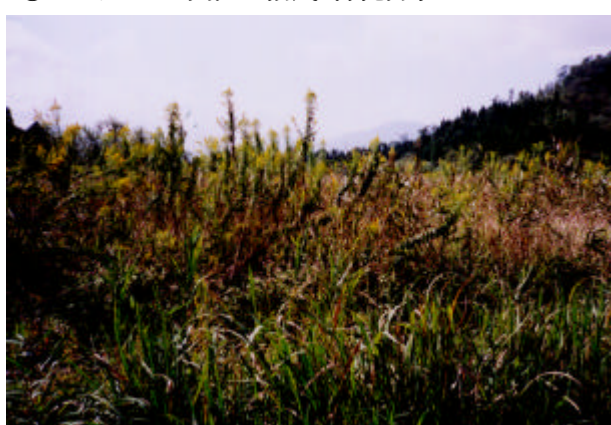
⑰ メダカやとんぼ、ザリガニがいる



⑱ パネラーの西江重信氏 沖縄日本めだかトラス 理事



⑲ 何かいるのかな



⑳ セイタカアワダチソウが広がる



21 マムシ注意の看板があるが20年間で1回しか



22 四方を山に囲まれた湿地帯



23 25ヘクタールの面積を歩いて行く



24 この黒い土が出ているのは猪が掘った穴

第3 コース

里山のビオ・トープを作ろう 白山地区へ移動 ～ビオ・トープづくり体験 昼食～

開催日時 平成16年10月10日(日)、会 場 白山地区

案内人：長谷川 巖 氏(環境省希少野生動植物推進員・市嘱託里地里山専門員)

この場所は小学校がビオトープを作りました。小さなのを1つ、2つ、3つになりましたし、上の段に2つあります。それから、白山小学校、第4分科会ですかね、発表したと思うのですが、生き物が結構増えてきました。まず、メダカですけど、他のところから水草を一握り持ってきただけです。そしたら、それに卵がついていて、卵がかえりました。この辺りにいるはずですが見えなくなってしまいました。卵で運んでやるとその環境に一番合う。動物というのはアベサンショウウオやら石川県のホクリクサンショウウオ、釧路でやっていますがエゾサンショウウオでも移植する絶対条件は卵です。アカウミガメなどご存知と思いますが、自分の生まれた場所に産卵するのです。時たまイシガメなんかでも自分の産卵場所が壊されてしまうと其処へ帰ってきます。道で轢かれることがしょっちゅうありますね。カエルなんかも自分が生まれた環境へ戻るという習性があります。だけでも、何でも育てようと思ったら卵が一番いい。メダカが育ちました。しばらくしますとゲンゴロウの仲間ですね。ゲンゴロウというと体の横のほうに黄色い筋が入ります。ゲンゴロウですが、その仲間はたくさんいます。最近ではゲンゴロウの図鑑で3属117種出ています。その中でこういう水溜りを作っておくとゲンゴロウがたまたま飛んできて産卵するという形になります。ゲンゴロウを育てようと思うと一箇所のため池ではなくて何箇所とあると繁殖が出来るわけです。逃げ場所があるわけです。時たま、ゲンゴロウも空を飛びますから、空を飛んで移動します。観察した中にはクロズマメゲンゴロウという1cmぐらいのゲンゴロウ、それからガムシ、ゲンゴロウとよく似ていますが黄色い筋はありません。それからクロゲンゴロウの3種類確認しています。ゲンゴロウが入ってきています。それから6月にしましたので、子供たちがビオトープを作ってすぐにシオカラトンボ、ギンヤンマ、タカネトンボがすぐに入ってきました。森林性のトンボもすぐに産卵に来ます。それから、ヒルやタイコウチですね、これなんかもすぐ出てきます。それからこの場所がいいというのは以前からあったところです。この場所が昔からあったところだからです。ここがこの近辺両脇に水溜りがないので、ここら近辺にいるモリアオガエルがここに産卵に来ます。だいたい福井県の場合ですと5月の終わりごろから6月の中旬に掛けて白い泡を作って卵を産みます。今年は、ビオトープを作る前にもうちょっと際のところさらに小さい泡を作って、シュレーゲルアオガエルというのが産卵に来てました。ここはアマガエル、今鳴いていますね、シュレーゲルアオガエル、モリアオガエル、ツチガエル、トサマガエルがこの狭いところで繁殖しています。だから今年作ったので来年になりますとここら一帯がカエルの産卵場所になると思います。もちろん、福井県は雪が降りますから、雪が融けたらこの場所辺りがヤマアカガエル、ニホンアカガエルの産卵場所になります。こういう風に、水辺を作ることによって大変生き物が増えてくるのです。当然これが出てきますと、コサギが来るようになりました。それからここら一帯アオサギがいます。アオサギも来るようになった。えさ場として見つけたわけです。こうやって水辺を作っておくとどんどん増えていきます。それに合せてそれらを食べる皆さんの嫌なヘビもやってきます。ここらでは、ヤマカガシ、シマヘビ、アオダイショウというのがどんどんどんどん増えていきます。特におたまじゃくしが好きなのはヤマカガシです。小さいのはこれぐらいで黄色い筋の輪があります。これはまだ毒はありませんけど、一年ぐらいたちますと奥歯のほうに毒があります。首のところに毒腺があります。事例としてヤマカガシで亡くなったのが一例(1984年)だけ報告されています。だから、日本の本土の中ではヤマカガシとマムシ、これだけが毒蛇になります。もちろんヤマカガシにやられた人はアレルギー体質の人だったので、普通の人は絶対大丈夫です。マムシだけはちょっと怖い。60cmぐらい。今咬まれても各病院に血清が置いてありますので、大抵治ります。マムシ百日といってマムシに咬まれて放置しておくとそのぐらいかかる。沖縄のハブは別です。私たちでも病院で血清をもらってから山の中に入っていきます。咬まれたら自分で注射します。日本の本土では大丈夫です。こういう形で、水辺を作ることによって生き物がものすごく増えてくるという形になります。この水辺では嫌なヤブカも育ちます。ガガンボ関係やその他の水生昆虫も育ちます。この水は谷川から引いていますので、条件として、本当はこっちの日当たりの良い方がいい。日当たりが悪い方は水温が上がらない。メダカが育ちましても上の段には育たなくてこの段に育ちます。やはり、自然の田んぼがこれが一番いい生物環境になります。そんなのをどんどん増やしてもらえばいい。福井県では23～25%が休耕田です。水張り休耕田が何か転作しなければいけないです。今どんどんどんどん増えてきています。

最後にひとつ！皆さんが米を食いなさい。そうすると田舎は元気になります。



バイオ・トープづくり作業風景 全員で汗を流す)



長谷川先生の講義



しらやまめだかの学校牧分校



全員で記念撮影

VII. 参加者の声

実行委員長 津郷勇先生へ

「全国めだかシンポジウム」ではたいへんお世話になりありがとうございました。
すべて成功裏に終わりおめでとうございます。計画から準備、開会から終わりまで緻密でお心のこもったシンポジウムに参加させていただき感激して帰途に着きました。バスの中でもどなたかが心のこもった気配り心配りに深く感謝します、と挨拶されましたが本当に私も同感です。開会でお子様達の素適な歌に合わせた舞台も最高でした。童話作家のご講演も胸に深く沁みました。中池見湿地も以前から行きたいと思っていたところです。笹木夫妻に加えて専門の先生方の素晴らしい説明付きで興味を持って聞かせていただきました。(かつては大野にもあいう湿地帯はあちこちにありましたが、埋め立てられています)。展示等も素晴らしく見習いたいことばかりです。本当にいろいろありがとうございました。帰りに奥村先生からいろいろ貴重なお話を聞かせていただき有難く嬉しく思っております。これからもどうぞよろしくお願い致します。

大野の水を考える会
寺脇敬永

実行委員長 津郷様
笹木です。

周到なご準備と運営、お疲れさまでした。中池見では、参加者が多すぎて、十分な対応が出来ませんでしたが、晴天に恵まれたのが最高のおもてなしになったと思います。
気温も上がり、心配していたメダカも元気な姿を見せてくれました。
こちら、今週末に向けて猛ダッシュです。皆さまにもよろしく。ありがとうございました。

早速のお便り恐縮しています。開催に当たってのこころ温まるおもてなしに感謝感謝です。
いつか当方での開催の時があると思いますが、みなさまの様なおもてなしができるか心配です。ただ、当地方の水環境をご視察のご希望がございましたら、いつでもご連絡ください。

須坂水の会 小林紀雄

実行委員長 津郷様

先日は、全国めだかシンポジウムに参加させていただきましてありがとうございました。
今回、初めての参加でしたが、津郷様をはじめ、みなさまのお力により、とても有意義な時間を送らせていただきました。あれほどの充実した会でしたので、さぞかし準備の方もお忙しかったことと思います。
いろいろとありがとうございました。
また、機会がありましたら、みなさまのご活動のお話しをお聞かせねがいたいと思います。
お時間がございましたら、是非、島根にもお越し下さい。お待ちしております。

特定公益増進法人(財) ホシザキグリーン財団
飼育展示係 田久和 剛史

実行委員長 津郷様へ

さて、先日のシンポジウムは大成功でございましたね。ほんと、一息も二息もつかれておられることと思います。開会式では、350名近い参加者が集ってのセレモニーは、先生のこれまでの活動・ご苦労が実ったといたく感動してしまいました。なかでも分科会では司会者・パネラーが一方的に話題を進め展開するのかと思いきや、それにフロアーが加わり、会場全体で、非常に真剣・活発な討議がなされておりました。やはり、第一人称にたって里地・里山を保護しようとする人たちが集ったが故の結果とは思いつつ、このようなわたしが出席してよいのかとすこし恥ずかしく思ってもおりました。

次の日、奥社長、杉林本部長とで菊人形を鑑賞させていただきました。まことにもって見事に表現されており、花芸術であると感じますとともに、さすが武生市が誇る大イベントだと思いました。
先生、たいへん有意義で楽しいひと時をすごさせていただき、大変感謝しています。
日ごとに秋が深まってまいりました。風邪などに注意されましてご健康にすごされますよう心よりお祈りいたします。また近いうちにお邪魔させていただきます。では、失礼いたします。

アイレック技建株式会社 北陸支店
高木 克典

実行委員長 津郷様へ

大会期間中は大変お世話になりました。また、お疲れさまでございました。大変素晴らしいシンポジウムでしたし、中池見のエクスカージョンも想像以上に素晴らしいものでした。ありがとうございます。
台風のお見舞いありがとうございます。われわれは、丁度台風から避難できて怖い思いをしないですみました。近所の方に何うと、今まで経験したことのない程の荒れ模様だったようです。ただ、韋駄天台風だったので、短時間で通過したようです。我が家は砂丘の中腹にありますので、浸水などの心配はないのです。アケビの棚が傾いだくらいで、被害らしいものはありませんでした。飛び散った木の葉の掃除に手間取った程度ですみました。ご安心下さい。スタッフの皆様にもよろしくお伝え下さい。まとめが出来上がるのを楽しみにしております。

渡部@藤沢メダカの学校をつくる会

実行委員長 津郷先生へ

先日の「めだかシンポジウム」参加させていただきました。
志を同じくする全国の皆さんのご意見をお聞きしポスターのわらべ同様、この自然の営みに発見と感動を伝えていきたいと思っています。
さて、熊が里に降り、殺生を重ね、台風が駆け抜け大地が大きく揺れ、多くの命が失われました。豊かな社会も、あたりまえの様に過ごしてきた日々の社会基盤も磐石ではないと深く胸に響いています。気力・体力・時間との勝負の災害対応、私たち現場の第一線で土木施設の構築・維持管理する者として、ここがかんばりどころ、みんなで力をあわせ、しっかり前を向いて進んでいきます。多少、お疲れ気味ですが、おだやかな水面を泳ぐめだかや、それをついばむ鳥たちが舞い、児らが瞳を輝かせ、走りまわれるふるさとにもどるようがんばります。
季節の変わり目、お体にはくれぐれもご自愛のほどを。

H16.10.25

福井県 朝日土木事務所
道路保全課 石田

実行委員長 津郷さま

めだかシンポジウムが盛大に成功裏に行われましたこと本当におめでとうございました。また、お疲れ様でした。講演では自然との体験と伝えることの大切さ、そして分科会では役所の担当者の本音を聞くことが出来ました。今回のメダカを通してこれまで日本人が大切にしてきた自然、神々への感謝、祭り等地域に根ざした文化を守っていくことが地味ながら早道なのかと思いました。
菊人形、式部の里公園にも行ってきました。
式部の和歌がありました。解説があれば親切ですね。菊は育てるのも会場での維持もご苦労がありますが大輪の菊、菊人形、菊の盆栽もいいものですね。
お蔭様で堪能させていただきました。有難うございました。

越前の 里ときめきて 菊人形
里山の 心残すや 菊の盆

また、お会いできる日を楽しみにしております。

アイレック技建株式会社
奥 要治

あとがき

謹んで各位へ

「2004 全国めだかシンポジウム in 菊香る越前 武生」が台風 22 号接近を撥ね曲げて、地元好天文字どおり菊薫る越前武生にて各地からお迎えした大勢の参加者を得て大盛會に終始しましたこと、ひとえに各位のお力によるものであり、実行委員会会長として心から感謝、御礼申し上げます。

参加者の声からも今までに出色のシンポジウムでした感動の二日でしたとの賛意を聞いております。

昨年開催のプレシンポから本シンポジウム開會に至る間での長期間に亘る各位のご尽力に敬意を表し、重々御礼申し上げます。

お疲れの出ませんよう、ご健康に留意頂き暫しご休息の上、平素のご勤務にまた御精勵の程を、ご健勝をお祈り申し上げます。

再度各位へ

お願いです。めだかの民話や方言を教えてください」

昔馴染みのメダカが最近では田園風景の中に見ることが極めて少なくなって、とうとう 1960 年台から急速に姿を消し、絶滅危惧種に指定されるに至っています。メダカと親しんだ世代が少なくなる中で、メダカの民話や方言すら失われていくのは大変残念な事です。そのため、現在、日本めだかトラス協會では、全国のメダカに関する民話・方言を残すためのガイドブックを作成中です。

各位でメダカの民話や方言をご存知の方がいらっしゃいましたら、ガイドブックに記載させていただきたいと考えます。是非、ご連絡下さいますようお願いします。

また、各位のお知り合いでこのような方面に知識をお持ちと思われる方々にもご協力をお願いしていただくよう宜しくご配慮くださいますよう併せてお願い申し上げます。

シンポジウム実行委員会会長
津 郷 勇